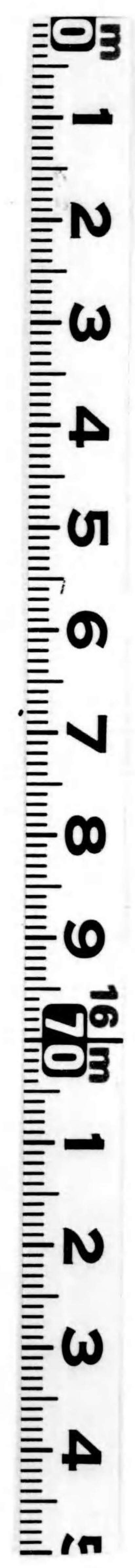


運命獨判斷

特100  
208



始





特100  
208

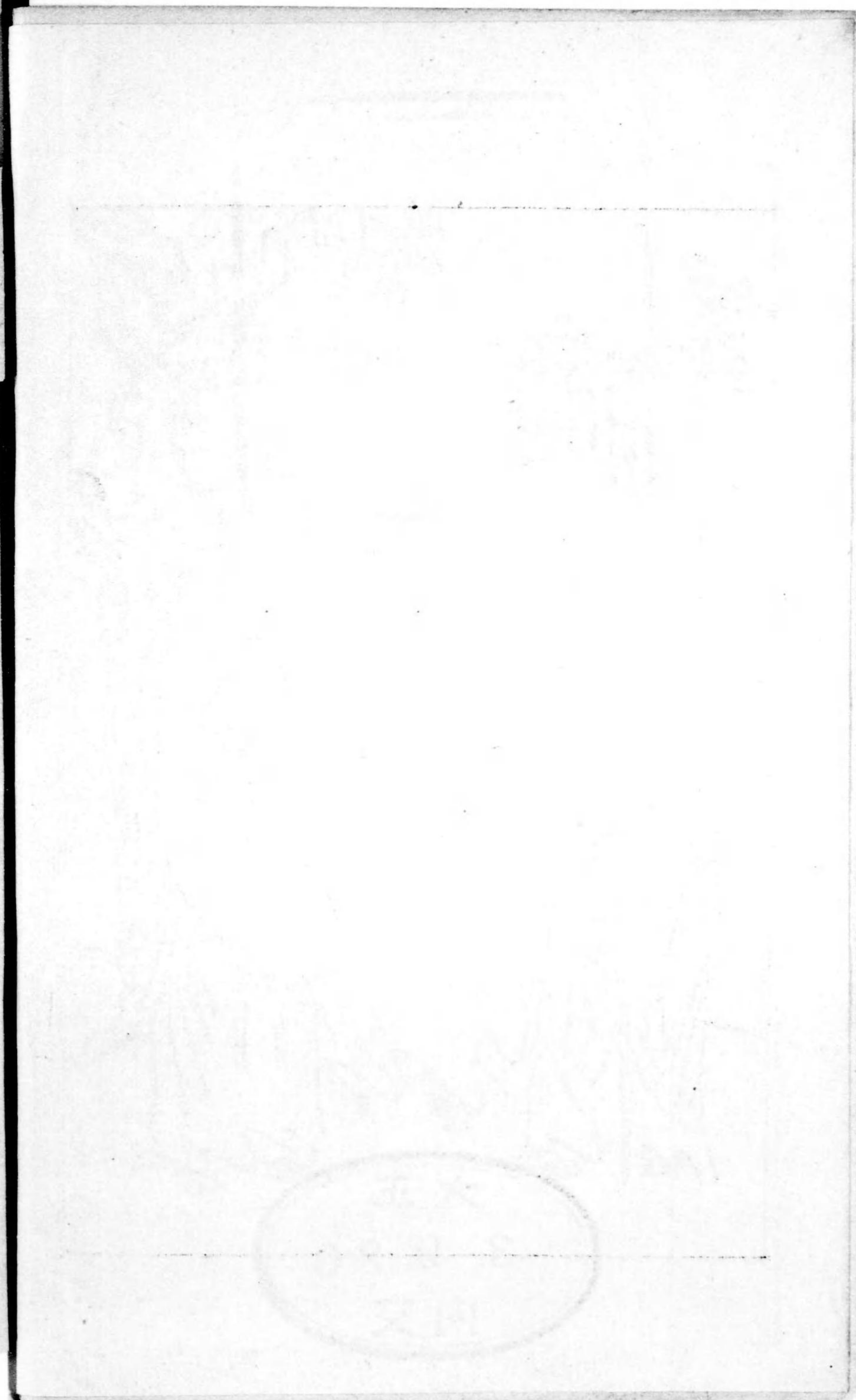
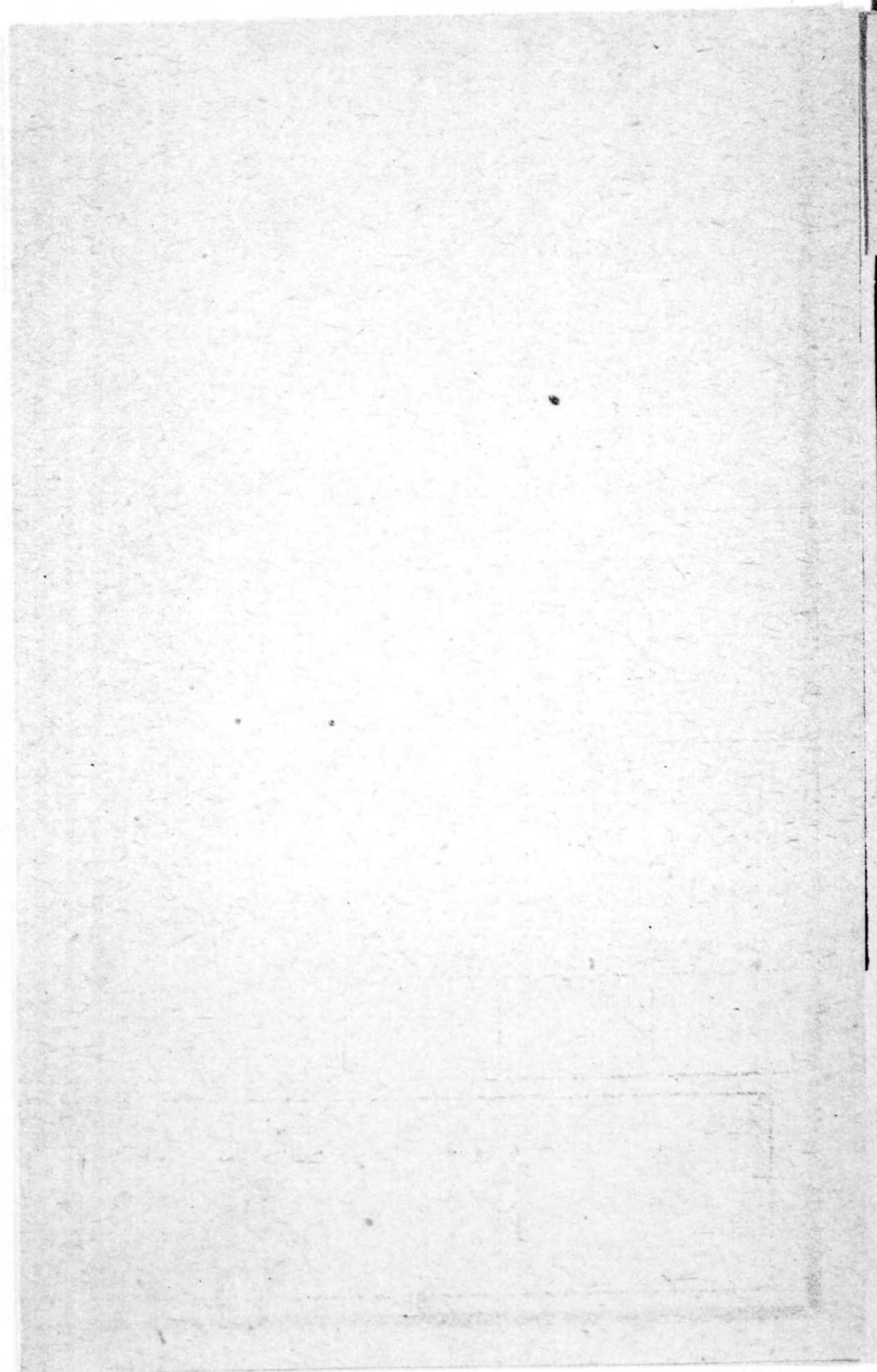






大正  
3. 9. 30  
内交











# 運命獨判斷

一名「座敷占ひ」

李虛中原著

はしがき

麻溪道人述

## ○千古の疑問

運うんが人ひとを作るつくのか、人ひとが運うんを作るつくのか、若もし人ひとが運うんを作るつくものなれば、世よの中の賢けん人は、皆みな富貴ふうきで、愚ぐ人は悉ことごとくく貧賤ひんせんでなければならぬ理窟りくつである、けれども、古いにしへより馬鹿ばか必かならずしも貧乏びんぼうならず、利巧りかう必かならずしも富貴ふうきではない、之これに反はんして若もし運うんが人ひとを作るつくものなれば、世よの中に齷齪あくせう働はたらくほど馬鹿ばかなことではなく、ソレ立りつ志しじや勉べん



學じや、ソレ勤勉じや忍耐じやと、餘計な心配苦勞をするに當らぬことである、けれども古來怠け者が藏を建てた例もなし、袖手をして居つて、百萬兩の長者にも攝政關白にもなつた例はない、シテ見ると運は人の作るものでもあるやうに見られ、さらばいつて、運が人を作るやうに思はれぬでもない、こゝが即ち千古の疑問たる所以で、諺に所謂「運は天、牡丹餅は棚」といふ如、曖昧なドツチ付かすの好譬喩を留むる所以であらう。

○運と不運

蓋し棚にある牡丹餅であれば、手を伸すか、或は踏み臺をして之を取るがよい、それが即ち運即ちハコブといふ所以である杯と、利巧に解釋する者があるけれども、ドノ棚にも屹度牡丹餅が載つ

かつて居ると限らぬ、そこで彼方の隅から此方の隅まで、四方八面手あたり次第に探し廻つても、終に、一生見當らぬ者あるは、所謂運のない證據で、ソレナラ矢張り「果報は寝て待て」で棚から牡丹餅の落ちて來るのを待つて居る方がよい、かくなつて見ると、運は即ちハコブなども、の解釋は一向當てにならぬことゝなるのである、こゝが即ち流石の聖人孔子をして嗟嘆之を久うして「窮達命あり、人事を盡して天命を待つ」といふ如き、悟つたやうで悟り切らぬやうな遁辭を發せしめた所以であらう。

悟り切れぬ世の中

されば「人類の努力は即ち今日の文明を産み出したもの、これ自然の克服なり」杯と大觀し樂觀して居る現代學者でも、矢張り此理には迷ふて「抑も運とは何ぞや」といふ問題を提供して、之が言



辭を繰返して居るのである、而して特に方今の如き世智辛き生存競争の激甚なる世にあつては、一層悲觀論者を輩出せしめて、終に運命論をして、近來の新聞雜誌上に跋扈せしむるに至つた所以であらう。

### ○運命判斷術

そこで翻つて運命判斷の歴史を尋ねて見ると、之は洋の東西を問はず、時の古今を論せず、夙に人間社會に行れたもので、支那には龜卜あり、泰西には臙占あり、我國には山鹿の骨拔占といふのがあつて、即ち當面に行はんとする人事の吉凶を判斷したものである、而して此等の不可思議を神意に出でたりとする所より所謂禍福なる文字を留むるに至つた、所が此等の研究は嘗に太古

の儘にて止むものではない、人智が進み、又社會が複雑になるに連れて、同じく吉凶判斷術も複雑なるものとなつた、印度の宿曜經に現はれたる宿命説、支那の陰陽道に唱ふる五行説、カルデアの考星術に推論する天の十二宮説等が其の著しきものである。かく進んで來ると、嘗ては禍福を、一に神意造化に出でたりと唱へたものも、後には個人々々によりて吉凶禍福の度を異にするが故に、吾人は須らく自己の宿命を質さざるべからざると説くに至つた、之が即ち生年月と運命との關係を論するに至つた端緒である、かくて後轉生輪廻や相生相尅や九星、干支、方位、家相と、あらゆる迷信俗想を混雜せしめて、一種不可思議の愈々判斷の付かぬものたらしめたのである。



○法秤の占法

所で今本書に紹介せんとする法秤の占法といふのは、所謂人の生年、生月、生日の干支を調べ、其の数の輕重によつて、其の人の吉凶禍福を占ふといふ便法であつて、之は唐の李虛中といふ曆占家が唱道したものである、而して其の法秤と名づくる所以は、法は靈妙なる神法といふ意味で、秤は即ち今日の用ふる金銀の輕重によつて吉凶を定むるといふ所より、此の文字を付したものである。

を貴賤貧富八字詩訣と名付くるに至つた。

○人間一生禍福占

かくて此の占法が宋明の間、支那四百餘洲に廣く行はれ、一々之を日用するに至つたから、其の間傳寫によつて魯魚の誤を生じ或は判斷上に混亂を來すに至つたのを、清朝に及び、潭陽の魏明遠といふ者が、之を研究して其の誤謬を正し混亂を解き、八字詩訣を改正増補して世に行ふに至つた。

所が、人の生月、生日、生時の干支を知るといふことは頗る困難なことで、最初よりかゝる點に注意を拂ふて居る者が少いから、こゝは一つ便法を設くるに如かずとし、即ち生年の干支の外は何れも之を神意に待つこととし、無我無心に寧ろ無念無想に入つて



生月、生日、生時の干支を探らしめ、其の偶然得たる干支を生年の干支に合し、之が目方を通算して、判断を下さしめるやうにした、それが即ち、人間一生禍福占の著である。

### ○菊丘臥山人の和譯

所で此の簡便なる法秤の占法が支那に行はれたのを、我が享和年間京都なる菊丘臥山人即ち大江匡弼(號文波)が和譯して世に公にし、同元年中秋大阪書林の京屋淺次郎より出版した、それが好事家の間に用ひられて、弘化三年初秋更に江戸、大阪の兩書林にて翻刻せらるゝこととなり、廣く世に行はれたものである。然し大正の今日には全く世人の記憶に残つて居ないから、そこで更に今日の風に説明解釋して世に公にしたのが即ち本書である。

### 本書の占法

此の法秤の占法にて、我が吉凶、他人の吉凶を占ひ看んと思はゞ、先づ其の生れ年は誰も知りたることなれど、九星納音表によりて干支を見定め、其の札一枚を取り置くべし。それより爾餘の總札をませかへし、皆々干支の方を下へうつむけ、自ら冥目して無念無想となり、何れの札なりとも三枚之を取り、其の一を生れ月の札とし、其の次に取つたのを生れ日の札とし、其の次なるを生れ時の札とし、此の三枚の札を初めの生年の札に合せ、其の干支の下に記せる金銀の數量を通算して八字詩訣を見るべし、其の一人一生の運命を判断すべく、又或事に臨みては、其の吉凶を判することを得べし。



若し其の通算の數に、**夕以下**の端數あるときは**四捨五入**し、**夕位**に打切りて、詩訣に對照し見るべし。

たとへば  

|    |      |      |
|----|------|------|
| 甲子 | 拾四 夕 | 生年の札 |
|----|------|------|

次に  

|    |      |      |
|----|------|------|
| 乙丑 | 五夕五分 | 生月の札 |
|----|------|------|

次に  

|    |      |      |
|----|------|------|
| 丙寅 | 九夕五分 | 生日の札 |
|----|------|------|

次に  

|    |     |      |
|----|-----|------|
| 辛卯 | 六 夕 | 生時の札 |
|----|-----|------|

を得たりとすれば、以上四枚を通算して**三十一夕四分**となるべし、其の時四分は之を切り捨て、**三十一夕**の詩訣を見て之を判断すべきなり。

### 貴賤貧富八字詩訣

此の詩訣は人間一生の吉凶禍福を占ひ見るのみでなく、一切萬事の吉凶を見ることの出来る要訣であれば、其の心得にて工夫發明して種々に應用せらるゝと、一には事の惑ひを解いて決斷心を養成し、二には家庭内の高尙なる一遊戯としても弄ぶことが出来るのである。

#### ○法秤輕重判斷

### 拾壹 夕

是は下賤の格で、衣食は不足して、生計甚だ困窮し、父母に



十二  
は離れ、妻子にも離る、貧人である。詩に曰く

爲人主孤栖 父母多刑尅

尅子又妨妻 兄弟妻兒離

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、先づ生質甚だ貧窮で、且つ孤栖とてヤモメ住ひをして暮さねばならぬ、それは何故かといふに、幼少にて父母に早く離れ、さて世帯をなすに至て、子を尅し、又妻を妨ぐとて、子を早く死なせ、妻を離縁し、或は死に別れ、其の上にて我が兄弟にも離る、から、兄弟妻子離るといふのである。若し此の命格に當つた人があつたら、常に竈の神を祭り、生きたる物を殺さず、陰徳を施して福を得るやうにするがよい、さすれば、其の貧窮をのがるゝに至るであらう。

### 拾貳 匁

是は下賤の命格で、無衣無祿の人として、生れながら貧賤の人である、又衣類食分にも不足勝である。詩に曰く

人生直蛇刑 婚姻不能成

六親不得力 出外好爲親

此の詩の意は、人生れて蛇刑に當るとして、此の人は必ず己の年に生れた人に相尅せられて、婚姻養子等をよくすることが出来ぬ、一生無妻で暮さねばならぬ、其上に六親の力を得ずといふて、親一家なども、甚だ貧なる故に、貢くれず、親類の力を得ぬから、外に出て他人の縁を親しみ、其餘力を得て、一生を



送るのである、此の孤獨貧窮をまぬがれんと思はゞ、常に己れの生れ年の干支の日に、竈神を祭つて祈るがよい。

### 拾參 匁

是は貧窮にして、苦を受け、又碌を勞するの命格である、碌といふのは、砂の中を歩む如くに苦勞するをいふ、詩に曰く

此宿大難當、 尅妻尅子亡、

人生遇此格、 孤栖守空房、

此の詩の意は、此の法秤に當る命格の人は、一生の中に大難當るとして、大なる災難に逢ふ事がある、人と生れて此の格に遇ふときには、親類もなく妻子も死に失せて、孤栖とてヤモメ住ひ

をして一生を送り、貧窮である。これが即ち孤栖空房を守るの謂である、若し此の命格を轉じて福を得んと思はゞ、常に陰徳を積むがよい。

### 拾四 匁

是れは孤寡にて、六親を尅害し、衣食奔波といふて、衣類少く、食祿うすきが故に、諸方へ奔波とかけめぐりても、福分なく、辛苦艱難して貧困なるをいふ。詩に曰く

人生宜出家、 却似水淘砂、

定宜出祖宅、 外處好勞華、

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、必ず出家沙門となりて宜



し、さあらば水の砂を淘ぐ如くに、却て身分清潔となりて、諸人の用ふる事もあらう、凡そ此の法秤に當る人は、祖宅とて、我が生れ故郷や祖父、親より住所の家を離れて、他國他家へ行って、立身出世をするであらう、故に外處好勞華といふ、他國へ行きて必ず立身榮花あるべしとの意である、勞華とは仕合せよく榮花なるべきをいふ、此の人故郷を離れて立身すべし。

### 拾五 夕

是は困窮貧賤の命格で、衣食浮沈の人にて、食祿衣類等、不足なる困窮難儀するをいふ。詩に曰く

此命多刑害、本是出家郎  
若不爲僧道、藝術好風流。

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、生れ出ると、刑害多しとて、甚だ運拙き人にて、物毎に障り多く出来、意のまゝに物事が成就せず、固より此の法秤に當る人は、出家沙門となるべき人である、若し又儒ともならずは、何なりとも藝道を以て、世に名を得て、家業繁昌すべき人である。

### 拾六 夕

是は貧賤の命格で、衣食共に貧しく、又苦勞絶えず、諸方に奔波と走り廻り、他郷他人の力を得て、仕合するであらう。詩に曰く

孤獨命不深、不由勞汝身  
米篩難堪用、儘頼倚別人。



此の詩の意は、此の法秤に當る人は、男女共に一生孤獨とて、ヤモメ住ひをして、女は夫なく、男は妻なく、短命無福なる故に、命殊からずといふ、汝が身を勞するに由なしとは、何ほど苦勞しても、其の功はあるまじ、依て米篩とは今いふ所の、米をふるふ篩である、此の米篩も米があつてこそ入用であるが、米がなければ用ふるに由がないとの譬へである、儘別人に頼り倚るとて、此の命格の人は、他人に頼よつて身命を保つべしといふ義である、若し此の法秤なる貧窮孤獨の身を轉じて、富貴ならんと思はゞ、己が生れ年の干支より七ツ目に當る男子を養子として之に養はるゝがよい。

### 拾七夕

是は勞碌、奔波、相刑尅害の命とて、一生の中砂の上を歩むが如く、勞苦して波の上を奔るが如し、難義を爲し、身上何かにつけて意の儘ならざるをいふ。詩に曰く

人情不相逢、家業盡歸空、

男女奔南北、夫妻走西東。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、人に交はるに、何となく人の氣に合はず、人に忌み嫌はるゝを以て、人情相逢はすといふ、さて家業は精出せども、次第に貧窮にして、金銀なくなる故、悉く空に歸すといふ、金銀及び家業の爲に南北に奔り、東西に走りて、色々と夫婦共に苦勞すれども、詮方なき命格である、故に之を轉して福貴ならんと思はゞ、常に庚申、甲子の



日夜を守るがよい。

### 拾八句

是は勞碌、辛苦、僧道の命として、此の人は男女共に砂の中を歩むが如くに、辛苦して身上思はしからず、一生貧窮である、出家になりてよろし。詩に曰く

命中離祖宅 出外有錢糧

兄弟不得力 獨身置田庄

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、命中祖宅を離るとして、此の人は先祖より住せる家はふさはぬ故に、其の家を必ず離れ、他所に出で、家業繁昌する也、故に外に出で、錢糧ありといふ、

錢糧は金銀米錢及び食祿ありといふ義なり、然し兄弟とは不和にして、其の力を得ず、唯だ獨身にて田庄を置くといふて、自分一人にて山林田島の主となるべしといふ義なり、立身出世をなすとも、兄弟の力をからず、自力を以て爲すべし。

### 拾九句

是は僧となりて住所定まらず、諸處に窮苦し、或は俗となりても、住所不定の命格なり。詩に曰く

輕蕩日飄零 好向道前遊

斷得香火力 遷居日西沈

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、生れ付きて我が先祖の家



に縁うすく、意輕蕩に放埒にして、日に身分飄零と衰へ、家業に元來疎き故出家沙門又は隱遁者の類ひとなりて、神佛の道を好み、遊行すべし、若し沙門禪宜の類を離れては、一生の難義困窮すべし、故に香火の力を斷得せばといふて、佛神につかへ、香火を業と爲す事を斷ち去らば、此の人は、一生難義困窮すべし、外の渡世を爲して、辛苦困窮する中に、年老いて、やがて日が暮れるであらうとなり、故に遷居日西に沈むといへり。

### 貳拾匁

是は乃ち貧窮艱難、辛苦不足の命格である。詩に曰く

辛苦一生愁、賢郎不回頭、  
子息相尅破、晚年涙空休。

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、生れ付いて薄福にて、辛苦し、一生貧苦して愁ふべし、賢郎頭を回らさずといふは、此の人は、世の中の賢人ともいはるゝ人に悪まれて、立身の道なく、子供ありと雖も、其の子皆不孝短命にして、親をみつがず、故に子息相尅破すといふ、子不孝にして其の身不仕合せなる故に、年老いて困窮難義す、故に晚年涙空休すといへるは、此の困窮のやむと、死ぬると一時なりといふ事である。

### 貳拾壹匁

是は衣食奔波、出外手藝の人として、男女共に衣食の爲に、諸方へ苦勞し行いて、必ず我が一藝を以て、人の助力を得、カツくに世を渡るか、若くは、其の藝にて富有の人となる。詩に曰



此命好經營 更宜好斧頭

屠兒并手作 衣食不須愁

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、男女共に常に經營として、普請造作を好み、或は又大工木細工などを好みて、爲すべき人である、若しさもなくば、料理茶屋又は料理人などをして一生を送るべし、此の命格は、甚だ下賤の作業を爲して渡世す、故に分明には占ひ難し、然し此の命格に當りて富貴の家に生れし人あり、老年は知らず、當座の榮華あり、卜者仔細にすべし。

貳拾貳夕

是は幼年勞碌、中末年清泰の人として、此の命格は幼少の中には辛苦困窮し、難義なれども、中年より老年に至り、次第に富貴繁昌すべし、故に清泰の人といふ。詩に曰く

日走心懶散 衣食亦難求

約束并家業 浮生百事憂

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に心矢猛に思ひて、人の取立るあれども、此の命格に當る人、元來心懶散とて、シダラナク不精にて、日に諸方を走り廻れども、衣食共に亦求め難し、約束並に家業とは、約束は史記の曹參か世家に出でたり、又漢書の高帝紀の註にも見へ、又文體明辨卷の三十三にも出でたり、今茲にいふ約束したる杯いふに同じ、然れば、此の人は、



人と固く約束したる事も、又家業もみな、間違ふ事多くて難義  
出来れば、浮生百事憂ふとて、萬事に付いて、かなしみ多し、  
但し老年には安樂なるべきなり。

### 貳拾參句

是は先難後易、出外に趨る事を求むるの命格の人とて、始めは  
難義なれども、後ほど好事あるの人なり、然れども、此の人兎  
角外へ走り廻り、諸事を求むる人なり。詩に曰く

平生更勞神 好事難少成

六親皆冷落 弓簇赴前程

此の詩の心は、此の法秤に當る男女共に、平生心を辛勞しても、

好事は少しも成就し難し、其上に親類も皆冷落し貧乏して力に  
ならず、進まんと欲すれば、弓簇前にむらがりて進み難し、故  
にいふ、弓簇前程に赴くとて、弓簇とは簇は鏃なり、又此の弓簇  
は九族といふ隠語にて、我が一家九族も、我れより前に貧窮にな  
りて、我が力にならぬとの義なり、是をば弓簇前程に赴くといふ  
然れども、此の人常に寵の神を祈念せば富貴の身となるべし。

### 貳拾四句

是は人となり智巧みに多能にして、家を出で、食を求むる人で  
ある、此の命格の人は智惠才覺がある。詩に曰く

骨肉難招多 修道過時光  
妻兒防刑剋 奔波日夜忙



此の詩の意は、此の法秤に當る人は、男女共に一家親類皆々不和にして、招けども來り親しまず、之を譬へば、我家を普請造作するに、月日を経て成就せず、空しく時光を過すが如く、我が家なれども、普請の中は住まれません、我が親類なれども他人の如し、妻兒刑剋を防ぐとは、女房子ども不和にして中よからず、常にいさかひ絶えず、奔波日夜忙しといふは、彼方此方と渡世の爲に走りまわりて、一生の中、智慧才覺にて暮すべし。

### 貳拾五句

是は身が間にして間ならず、九流藝術の命格である、此の命格に當る人は、人目には間なる體に見へて、甚だ間ならざる家業的の人なり、九流とは儒者を始め、此の類の者、九家ほどあり、然れば此の人は、儒者か醫者か、佛者、神道者の類又は藝道を以て世を渡るべき人なり。詩に曰く

此命多剋剝、先難後易過、  
中末方平等、發達在晚年、

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、剋剝多しとして、萬事に差障りのみ多く出來て、意に任せぬ事多しとなり、中末方に平等とは、中年(三十歳)末年(四十より六十まで)は萬事さしたる難義もなく、又仕出したる事もなき故、平等といふ也、晩年(六十歳より後)には、必ず發達をし、意の儘に立身出世す、此の法秤に當る人は、老年に至るほど仕合せよく向ふべし。



### 貳拾六句

是は辨營運とて、辨口利發を以て運を開き、先には貧しく、後には富貴なるべし。詩に曰く

命中不主財、東去又西來

若到交末後、快活永無憂。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に命中とは、一生の中は財寶を主とらずと也、故に東に去り、又西に來りて苦勞すべし、若くは此の人中年よりして、思ひもよらず、仕合よい事があらう、故に末後に交はるに至ては、必ず意のまゝに立身出世すべし、故に快活永く憂ひすといふ、快活とは意勇みいさぎよ

く、萬事思ひの儘になり、立身すべしとなり。

### 貳拾七句

是は群を超へて衆を出で、聰明にして貴人に近づき、立身すべき衣祿の人である、食祿ある人なり。詩に曰く

此命近貴人、聰明日日新、

僧道多財寶、常人作寶珍。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、貴人に近づきて、聰明日々に新なりとて、發明才覺を以て貴人に取上げらるべしとなり、然し此の人は出家沙門となれば、大寺の住持となりて、財寶に富む。又常の人なれば、人の爲に重寶せらるゝ人である。



### 貳拾八句

是は自卓として、萬事に卓出して人となり、才能ありて貴人に近づくべき人の命格である。詩に曰く

自命多財寶、  
為人心論事、  
手作近貴人、  
衣食足不失

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、自から財寶多き人である、固より人となり才能ありて萬事を論辯し、我が發明を以て貴人に近づきて立身出世し、衣食共に不足なく、一生安樂に暮すべき人である、故に衣食足りて失はずといふ。

### 貳拾九句

是は才能を以て客商となり、諸國へ行きて人に用ひられ、又は武士軍人となりて權勢つよく、又は學式として、一切の式作法を學びなどして、随分智恵ある人である。詩に曰く

此命宜打作、  
更宜執刀鎗

若無藝術狎、  
骨肉主分張

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、男女共に宜しく何事なりとも、一藝を精出して、勉め學ぶがよい、又武士軍人ならば、刀鎗を學ぶべしとして劍術を學びて上達し、此の藝にて立身するがよい、若し藝術に狎れる事なき人ならば、自然と一生難義し、骨肉親類の爲に家屋敷を押領せられ、其の身は諸處に流浪すべし、故に骨肉分張を主どるといふ、藝術といふに曰くあり、藝術



とは其の人の一心をさす、藝術は萬能一心といふ諺思ひ合すべし。

### 參拾 匄

是は衣食餘りあつて、獨り自から卓立し、人となりて貴人に近づき、貴人に扶助せられて立身出世するの命格にて、一家を成すの人なり。詩に曰く

不招親田庄 自成立他郷

氣剛艱難立 妻重始無殃

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、我が親類の力を以ては立身なり難し、故に親の田庄を招かずといへり、故に他國他郷へ行き去りて身分を立て、氣強く持ちて萬事を成すべし、故に氣剛、艱難に立つといへり、氣を剛勢にして、何事も意を張つて、或は辛苦艱難の中に立ち、其の難義を凌ぎおほすれば、立身出世の場には到るべし、但し始の妻は縁うすく、後の妻を迎へて後、災をのがれて立身出世す、故に妻重なりて始めて殃なしといふ、始め貧しければ、後に仕合せよき人となる。

### 參拾 壹 匄

是は先には貧しく、後は富んで貴人に近づき、立身すべき命格なり、又藝術を以て衣食共に足り、富貴となる人也。詩に曰く

事有頭無尾 平常人守己

中限家道昌 求妻無有子



此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に萬事を爲すに、頭は如何にも成就すべく見へて、尾はりなきとて、後に到り、成就せず、然れども甚だ運つよき人なる故に、平常諸人が尊敬して己れを守護するが故に、中年より次第に家業繁昌して、立身出世すべし、但し此人妻ありて子なきなり。

### 參拾貳匁

是は性巧みにして、人に過ぎ、萬事に精しく通じて、衣食満足し、老年に到りて、貴人に近づき立身出世すべし。詩に曰く

性巧百事能、 夫妻子孫榮

晚年壽永吉、 四方日日增

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、生れ付き利發才智ありて、萬事に達し、立身出世する、故に夫婦共に、子孫永く榮へ、老年に至るほど仕合せよし、されば晩年に壽永吉である、此の人は次第に一藝に名高くなり、四方より人々來り集まつて、尊敬日に増すのである、これは男女共に吉祥の法秤なり。

### 參拾參匁

是は衣食厚く、重なりて富貴の根基で、又藝術に巧みなるの命格である。詩に曰く

命中多富貴、 口食四方祿

苦久學文章、 術巧多財穀



此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、生質福分あつて、俸給加増を得、又家業繁昌して食分満足である、故に命中多くは富貴、口食四方の祿といふ。又辛苦すること久しく、學問怠りなければ世に名高くなる、四方の人に用ひらるゝのである。されば術巧みにして財寶も米穀も多くは富むのである、若し之が常の人であれば、此の意の如くして立身する、又女は夫を持ちて榮へるのである。

### 參拾四句

是は財穀餘りあつて、内助を得ることを主る、爵祿富貴の命格である。詩に曰く

智惠得賢妻、榮華兩利宜

### 此相多勞苦、不愁食與衣。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女は共に智慧ある人である、男は賢妻を得る、男女共に榮華にて仕合せよく、家業も運命も二つながらよい、但し此の人は人相甚だ悪しく、勞苦ある相である、けれども、必ずしも相によることはない、食分、衣類共満足の人であれば、相の悪きをいふ人あるとも愁ふるに足らぬのである。

### 三拾五句

此は福祿あつて、先には艱難し、後には安樂となる命格で、始めは人の家に寓し、後には我が住居を買求むべき人である。詩に曰く



安宅常漸出、六親不順情

過房須借姓、妻末方保身。

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、男女共に始めは貧窮にして、借宅をして世を渡り、後には次第に立身出世する、故に宅を安んじて漸く出づといふ。六親情に順はずとは、一家親類とは不和にして中惡く、過房須らく姓を借るべしとは、始は借宅の身分なれども、人に隨ふて己が姓名をも名乗らずして、他人の家名又は氏などを借りて世を渡る位である、けれども次第に立身して姓名もおのづと名乗り、遂には家名をも揚ぐるのである、妻も度々變れども、後の妻に縁ありて、永く身を保つといふ。

參拾六句

是は群を超え、衆を抜んで、智慧才覺あり、衣食共に満足するの命格である。詩に曰く

卓立成家計、生涯置田庄。

巧性多智慧、不比一列看。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、自分の智慧發明を以て、諸人の中に卓立して、家計を立て家業を爲すべし、固より此の人、一生の中に福分があつて、田畠又は金銀を所持するところが出来る、此の人は巧性にして智慧多く、只だ一通の人とは別である、甚だ衆人に抜んでたる人である、故に一列の看に比



せずといふ。

### 參拾七句

是は聰明富貴にして、才能厚く、重き福德あるの命格である、男女共に甚だよし。詩に曰く

近貴已招財、性巧并有謀、

食不虧有壽、到老事和諧。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女は共に、貴人に近づき、取擧げられて立身する、故に貴に近づきて已に財を招くといふ。財とは財寶の事で、此の人天性物に巧みであつて、并に謀智がある、故に食分あり、壽命あり、老年に至るほど、萬事和らぎ

諧ふて、吉祥なることが續くのである、壽命富貴共に兼有する人である。

### 參拾八句

是は財祿豐厚であつて、有職の人の命格である。詩に曰く

性巧與伶俐、家道興妻兒、

待人隨時應、人生侈素肥。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女は共に、天性と發明利巧であつて、諸人に重寶がられ、其の縁にて家業も繁昌し、妻子共に榮花である、此の人は甚だ發明であるから、人を待すること、人を尊敬し、時は宜しきに應じて、萬事を行ふに依つて諸



人其の實直なる心を感じて、次第に歸服し、立身出世をするのである。

### 參拾九句

是は貴人に近づき、福あり祿あるの命格である。詩に曰く

衣食不須勞 無餘藝術高

子孫遲見好 貴盛氣雄豪

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、男女共に衣類、食分共に満足である、此の人藝術に於て名を擧ぐる事あつて、立身出世する、但し此の人は子あれども中年より後、老年に至て誕生する、若年の子は育たぬのである、此の人次第に貴く、氣は雄豪

として、氣象豪剛にして、萬事を氣にて推し行ふのである、中年より立身する。

### 四拾句

是は富貴にして、一生涯我が智慧謀を以て身上を廣くし、物事に心を用ひて立身する機關の命格である、機關とはカラクリの事。詩に曰く

此格貴以成 榮貴壽長生

得運成家計 富貴子孫名

此の詩の意は、此の法秤に當る男女は、共に生れながら貴き人であれば、固より富有で、壽命も永く續くのである、若し左も



なく若年に貧窮であれば、一旦運を開く場所あつて、忽ちに家業繁昌して、家藏を建てならべて、富貴子孫に傳ふる人で、世に其の名を知らるゝのである。

### 四拾壹句

是は知行取り(俸給)か、又は貴人の子か、才智ある人、衣類食分充滿で、富貴の命格である。詩に曰く

富貴俱全事、平生過房人、

時至成家計、晚年子孫興。

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、男女共に富貴であつて、俱に萬事を全うする、但し壯年の時は、人の家に寓して甚だ流

浪の身である、けれども、時節到つて家業に取つき、次第に繁昌し、子孫も出來て、老に至るほど仕合せよく、子孫も昌ゆるのである。此の人多くは知行取り、即ち月俸取りか、又は田地持の豪農である。

### 四拾貳句

是は兵權有職として、軍人の職分ある命格である、官も高く才能ある人で、若し左もなくば、町家の名ある人で、身分ある人か、華族の家に生るゝ人である。詩に曰く

性寛心好施、定國事方隅

縱富難爲子、榮華總是空。



此の詩の意は、此の法秤に當る男女は、共に生れ付き、寛かにして慈悲心あつて、施行を好み、國を治め、家を治むるに、方隅として、四方四隅のすみ／＼まで政道行渡り、萬民喜ぶのである、但し此の人富貴なれども、子孫必ず無きを以て、家一代にして榮花總て空しといふ、若し之を轉じて子孫あらしめんとならば、早く養子をするがよい、但し平人は此の命格に當れば、吉は大に吉に、凶は大に凶である。

### 四拾參匁

是は財祿厚重、自手家を成すの人として、財寶官祿厚くして、自分の力にて家業を廣くし、富貴となる人である。詩に曰く  
妻益子性柔、近貴得富豪、

守常中限好、富貴始奔波。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、甚だ吉である、此の人男ならば、妻の發明才覺なるを得て、其の子も亦心柔和なるを生むことが出来る、此の人能く五常を守るときには、中限好として、中年に至つて吉であつて立身する、若し又其の意横しまであつて、身の行よろしからぬ時には、「富貴も衰へて、始めて奔波として、流浪の身となるであらう。

### 四拾四匁

是は才能あつて學文を好み、貴人に近づきて、智慧聰明、財祿共にある人である。詩に曰く



此命豐財祿、穩々任他力、

子貴妻蒙力、性柔壽命長。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、生得財祿に豊かである、穩々とおだやかに意を持ちて、他人の力をかり、自分の才覺を出さなければ、子貴くなり、妻の力を得る、然れば何事も人の意にそむかずして、他人の力を借りて、色を柔和に持てば、壽命長くして財寶に富むことが出来る。

### 四拾五句

是は福祿厚くして、極富の命格である。詩に曰く

此格將來倫、智惠有聲名、

妻子相和順、凡事最稱情。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、生れ付き、柔和であつて、智惠才覺あり、聲名たかく、妻子相和順して、凡て事を爲すに最も人の心になひ、又おのれが心にも稱ふて、次第に立身するのである。

### 四拾六句

是は富貴餘りあつて福壽の命格である。詩に曰く

衣食不見虧、足富費心機、

六親不得力、末限喜有衣。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、衣食共に缺くる事な



く富貴である、けれども、其の富貴故に心機に苦勞絶えず、此の人は一家や親類の力を借らずして、老に至るほど立身出世をして、衣食共に充満するであらう、故に末限喜び衣にありといふ。

### 四拾七句

是は官祿富貴で、學識の命格である。詩に曰く

此命近黃堂、文章藝術強、  
不作僧道相、性巧色衣部、

此の詩の心は、此の法秤に當る人は、男女共に智慧才覺ありて、儒者か醫者の類か、若くは官邊の學者となる人である、文章を

以て藝術の名を得る、けれども出家沙門とはならず、性巧みであつて、何さま凡人ではない、黃堂とは姑蘇の府治を世には黃堂といふ、日本にていふ屋敷である。

### 四拾八句

是は官員、財祿、厚重の命格である。詩に曰く

生來有官職、四方多衣食、  
終末還未吉、財穀喜進益、

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、生質官職の人である、故に四方より衣食を貢きて充満する、若し官人武家の類でなくば、是は民間の大家で、何れも老年に至て、少し宜からぬ



難義があらう、然し多くは財寶米穀には不足なき人である、唯だ老年を慎むがよい、但し食分は到る處にある。

### 四拾九句

是は性巧に、精神にして、倉庫財祿ある命格の人である。詩に曰く

人生掌倉庫、四方衣食多、

貴人常欽仰、財祿常無傷、

此の詩の意は、此の法秤に當る人は男女共に生れ付き福分ありて、家倉を多く持ち衣食充滿して不足がない、貴人に敬はれて財寶官祿ある人である、若し凡人ならば、大分限者即ち富豪となるべき人である。

### 五拾句

是は文武の才能あつて錢穀豐盛の人である。詩に曰く

此相最聰明、爲人寔公平、

一生多快活、到處有人情、

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、甚だ發明才覺あつて、家倉を多く持ち、衣食充滿し、心正直なれば萬事吉である、人の爲に公平と廉直なれば、一生中安樂快活である、男は文武の才能あつて貴人に取立てられ、金銀米穀豊かにして、一生貧困の事なし、到る處人情ありとは、諸人に愛敬せらるゝをいふ、



大吉なり。

### 五拾壹爻

是は祿厚く官職財祿あつて榮華富貴の命格である。詩に曰く

此命最賢良 資財福壽昌

若無官貴壓 父母早年亡

此の詩の意は、此法秤に當る男女共に甚だ實貞正直である、故に資財福壽昌として、一生食分豊かにして、安樂である、然れども此の人は官位の高い人ではない、若年にて父母に早く離れる、貴人には宜しく、凡人には凶で、父母を尅することがある。

### 五拾貳爻

是は兵權を掌握して富貴長命の格である。詩に曰く

此命大吉昌 權柄入廟堂

初年多富貴 未主足初郎

此の詩の意は、此の法秤に當る男女は、共に生れ付き福貴大吉祥で、多くは武家軍人である、此の人權柄威勢があつて、其の相多く物の頭となる、初年に多く富貴であつて、立身し、老年に至るほど富貴兵權を握る人となる、又壽命も甚だ長くして、子孫に至り繁昌するのである。



### 五拾參句

是は青衣、貴人、僧道、門中貴人に近づくの命格である。詩に曰く

此命無六親、僧道可安身、

爲官多進職、夜々到相迎。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、生れて父母に縁薄く、又一家も少し、此の人は出家沙門となりて一生を安くする、若し沙門ならば、僧官を得て、僧中の知識又は大僧正ともなるべき人である、夜々相迎ふに到るとは、此人は何になりても、諸人が尊敬供養し、晝は勿論夜中までも請待して迎ふるをいふ、

但し醫者儒者、藝者の類は吉で、常人ならば中年までは凶である。

### 五拾四句

是は武家即ち軍人にして、勇猛權威あり、財祿ありて富貴なる命格である。詩に曰く

此相足財豊、自下自相加、

爲人多巧智、財祿好榮華。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、多く武士軍人にして、財寶豊かに富むべし、此の人貴に居て下をあはれみ、慈悲深く、智恵ある人であれば、諸人多く靡き、随ふて榮華繁昌すべし、



但し町家の人ならば家財多く出来るであらう。

### 五拾五句

是は八品の官職、財祿豊隆の命格である。詩に曰く

命貴合陰陽、福壽入印堂、

士庶居産業、爲官見君王。

此の詩の意は、此の法秤に當る人は、男女共に位八品の官人とならう、若し左もなくば、凡人にてはあるまじ、此の人の相は、陰陽に合し、福壽印堂に入るとて、印堂とは眉の間をいふ、相法に印堂交らざるこれ保壽の官とあつて、此の人の相多くはかくもあらう、武士商人なりとも家業繁昌して子孫多からう、官

人ならば次第に立身昇進して君主に近づき仕へるのである。

### 五拾六句

是は七品の官職、貴掌、榮花、福壽の命格である、甚だ吉なり。詩に曰く

推來好命中、官幕盡皆通、

在路宜阻滯、富貴勝石崇、

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、生れ付いて甚だ福分がある、官人ならば、七品の官職、常人ならば、大富豪とならう、此の人官位次第に昇進して遂には極位に至るであらう、然れども此の人中年に至りて、災難あつて、暫らく身分安から



ず、なれども、遂には其の災難も消え失せて安全であらう、此の人は生得福分があつて、富貴なる事漢土の石崇の如くであらう、石崇は晋紀に其の傳があつて、財産豊積、室宇宏麗にして貴戚王愷、羊秀の徒と奢靡を争ひ、珊瑚の高さ三四尺なるを、六七株、二三尺の物は其の數を知らぬ程出して、終に王愷をやまらした程の富有の人であつた。

### 五拾七句

是は六品の官職、文章世に秀で、衆を壓し、學藝精通の命格である。詩に曰く

貴星在本位、身屋堂及第

士庶一時同、榮富無阻滯。

此の詩の意は、此の法科に當る人は男女共に、六品の官職を得る人か、左もなくば大富豪とならう、尤も貴人の相があつて、諸人に尊敬せられ、官位次第に昇進して極位に至らう、凡人は次第に辛苦をぬけて立身出世し、子孫繁昌するのである。

### 五拾八句

是は官祿旺相、才能性直、富貴の命格で、世に名を知らるゝ人である。詩に曰く

逢此主文章、富貴大吉昌、

爲人多剛直、財豐福壽長。



此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、生付て學才あり、富貴大吉昌で、心剛直とすなをにして剛勇也、女は善き夫を得て立身し、男は財寶豐饒にして命長く、官祿ある人で、次第に立身す、然し中年に至りて災難がある、慎むべし、若し壯年に貧窮ならば、竈の神を祭りて時節を待つがよい。

### 五拾九句

是は五品の官職、財祿、厚重の命格である。詩に曰く

生來足衣食、富貴座黃堂、  
公直存心地、名位播鄉邦。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、生れ付きて福分あり、

衣食充滿して大富貴になる、此の人正直で萬事に私がない、故に名も高く位も次第に昇進して、一國の主となるか、左もなれば誰知らぬ者なき大家となるであらう、若し又此の命格にはづれ貧窮難義の身なりとも、中年より後には必ず立身すべき人である、さて詩に黃堂に坐すとあるは、黃堂は、神仙通鑑卷七に曰く、姑蘇の府治を世に黃堂と號すと、是は我國にていはは黃堂とは大名屋舗の事である、其の屋敷を雌雄の二黃を以て塗りて、火災を仙人が鎮ひたる故に、其の屋敷を黃堂といふた、此の黃堂は昔より火災なしといひ傳ふ、これ漢土の蘇州にある大名屋敷の事で、火災もなき安樂なる黃堂に坐す如しといふのである。



# 六拾匁

是は四品の官職、榮花、福壽、用祿の名格の人で、多くは平人ではない。詩に曰く

生來進寶田、命裏有餘錢、

自手成家計、榮華在晚年。

此の詩の意は、此の法科に當る男女は、共に官位は四品の人となる、若し女ならば、此位の官人の女か妻とならう、若し又平人ならば、大富家の人で、財寶あり、若し或は貧困の人であれば、一生の中食分ある命格を失ふた人で、老年に至てますます貧窮孤獨の身とならう、然るに此の命格に當りて外れざる人は、

老年に至るほどに、次第に立身榮華がある、但し此の人は、自分の福力を以て家業を起し、立身繁昌する、平人も其の通りである。

# 六拾壹匁

是は法身、官掌、風真、權柄の命格である。詩に曰く

人身居遠郷、富貴必相當、

相家宜改變、出外置田庄。

此の詩の意は、此の法科に當る男女共に、生れ付いて故郷又は祖家に縁薄く、他國へ行て富貴繁昌する、若し又富貴でなければ其の居宅を改め替へてよい、此の人壯年には貧窮艱難し、中



年ねんに至いたつて立身りつしん出世しゅつせする、但たゞし出家しゅつけ沙門しゃもんとなつて宜よろしい人ひとである、女をんなは他家たけへ嫁かして立身りつしんする、男女だんなぢよ共に故國ここくに縁えんありとて、遠とほき外國ぐわいこくへ行くことがある、外國ぐわいこくに行ゆけば、田庄でんしやうとて田畑たまたの主あるじとなりて仕合しあはせするのである。

### 六拾貳匁

是これは三品ほんの官職くわんしよく、權柄けんべいある命格めいかくである。詩しに曰いはく

此命こゝ近ちか公卿こうけい、温經おんけい命めい稱せう情じやう、

是非しぜい難なん得とく惹せき、爲な官くわん徹てつ底てい清せい。

此この詩しの意いは、此この法はふ秤ひやうに當あたる男女だんなぢよは共ともに官家くわんけに生うまれて、官位くわんゐ次第しだいに昇進しやうしんし、遂つひには大臣だいじん公卿こうけいにも至いたらう、若もし又また平人へいじんならば、

甚はなまだ貧困ひんこんで名なある人ひととならう、子孫しそんなく、老年らうねんに至いたりて、他人たにんの救すくひを得えて命いのちを終やるであらう、官家くわんけの人ひとならば、甚はなまだ昇進しやうしんして、武家軍人ぶけぐんじんならば、俸祿ほうろく加増かぞうを得えやう、但たし是非しぜいをいはず、兔とに角尊かくそん敬けいせらるゝ人ひとである。

### 六拾參匁

是これは指揮しき大守たいしゆ、萬戶ばんこ將軍しやうぐんの命格めいかくである。詩しに曰いはく

形格けいかく多た高貴こうき、爲な人心にんしん性剛せうかう、

仕官しくわん公庭こうてい吉きち、庶人しよじん万まん事昌じやう。

此この詩しの意いは、此この法はふ秤ひやうに當あたる男女だんなぢよ共に、生うれ付つきて武官ぶくわんの人ひとで、貴たかきこと諸人しよじんにすぐれ、人ひととなり心しん性剛せうかう勇ゆうにして、軍中ぐんちゆうに



あらば數度の功名を顯はし、主君の威勢に劣らず、女は武家の妻となる、若し又平人ならば、一生の中に大難あつて、男女共に辛苦多く、中年に至つて安堵するのである。

### 六拾四句

是は二品の官職、尙書侍郎の命格である。詩に曰く

身居坐琴堂 爲人甚忠良

若不居官位 亦是發財郎

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に官家に生れて、諸人に尊敬せられる、此の人忠義の心あつく、正直にして萬事に私なくば必ず官位を昇進して榮華があらう、但し武家平人此の法

秤に當らば、辛苦萬端で、終に大富貴を得る、女は官家に生れたるは難なく、武家平人の家に生れたのは、夫に付きて難義多く、中年に至つて安堵して仕合がよい。

### 六拾五句

是は權威重く、福德厚き命格である。詩に曰く

福祿壽有零 富貴祿天深

娶妻生貴子 白玉積黃金

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、大富家に生れて、權威つよく、福祿壽の三つともに具はりて、諸人尊敬する、且つ妻を娶りては、貴子生るとして、富貴になる子を得て、我が一生



もし貧窮なれば、此の子成人して安樂なるべしとなり、故に白玉に黄金を積むといふ。女も善き夫を得て、次第に富貴繁昌すべきなり。

### 六拾六夕

是は公侯駙馬、丞相の命格で極貴の人である。詩に曰く

滾々壽命長 平生近帝王

聰明多謀官 筆下四海揚

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、大家に生れ、極めて貴き人にて、然も壽命は滾々と泉の流れ出で、盡くることなきが如く長し、尤も此の人は、多くは平人にてはなく、公侯駙馬

丞相として、公は三公をいひ、侯は諸侯として、舊時我國大名の如きか、或は駙馬とは漢土にて天子の婚をいふ、丞相は大臣なり是の如き官位の人なれば、常に天子に近づき奉る、元來此の人聰明にして謀智多く、坐ながら四海に高名轟ろき、萬人の上立つべき人にて、女も此の如き威勢ある極貴の女なり、若し平人この法秤に當る者は、大に身を慎むべし、正直にして私なく、慈悲深ければ、遂に立身出世して、世に知られん、若し邪曲あれば、一生難義困窮して命を絶つのである。

### 六拾七夕

是は英名世に冠たる命格で、入國來朝、上格の命である、凡人の命格ではない。詩に曰く



壽高福難量、公主富貴昌、

階下呼万歲、男女列成行。

此の詩の意は、此の法秤に當る男女共に、大貴人にして、壽命も永生なり、福徳は量り難し、此の法秤に當る人は、凡人にてはなく、女は公主である、公主とは漢土の天子の姫宮をいふ、女ならば此の如き貴人にて富貴此上なく、階下に萬歳を呼ぶ、最も高き地位である、若し萬一此の法秤に當る人あらば、身分を慎みて大切に持つべきである。

### 運命獨り判斷終

大正三年九月十日印刷  
大正三年九月廿五日發行

定價金二拾五錢

著者兼發行者 足立四郎吉

印刷者 高橋一郎

複製  
不許

印刷所 成章堂  
東京市神田區雉子町三十四番地

東京市麻布區森元町貳丁目八番地

發行所 中外出版社

振替東京壹壹參九壹番



# 紀念廉賣廣告

足立栗園先生快著 (三版)

千代田城義憤物語

江戸殿中三百年間の刃傷事件と赤穂義士に對する學者の評論を詳述したる史談なり。◎四六版裝釘。題名付。◎紀念特價一部郵税共金四十錢。

三輪田真佐子女史序 栗園主人編著 (三版)

和歌俳句家庭訓話

名歌句二百を主題として古今の逸事美談を引證したる修身處世の好教訓にて家庭に缺くべからざる珍書也。◎紀念特價一部郵税共金六十錢。

元祿軍學者盛正述 栗園主人校註 (再版)

士道武士としては珍書

元祿隱士盛正の遺著にして古武士の日常生活を説くこと詳細に戦國の逸話を満載す附録に上杉謙信著日用修身卷あり。◎紀念特價一部郵税共金四十錢。

發行所

東京市麻布區森元町貳丁目八  
振替口座東京壹壹參九壹番

中外出版社



|  |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |
|--|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
|  | 未      | 宮      | 午      | 宮      | 巳      | 宮      | 辰      | 宮      | 卯      | 宮      | 寅      | 宮      | 丑      | 宮      | 子      |
|  | 九<br>分 | 甲<br>午 | 十<br>分 | 乙<br>巳 | 二<br>分 | 甲<br>辰 | 十<br>分 | 乙<br>卯 | 廿<br>分 | 甲<br>寅 | 十<br>分 | 乙<br>丑 | 五<br>分 | 甲<br>子 | 十<br>分 |
|  | 十<br>分 | 丙<br>午 | 十<br>分 | 丁<br>巳 | 九<br>分 | 丙<br>辰 | 九<br>分 | 丁<br>卯 | 九<br>分 | 丙<br>寅 | 九<br>分 | 丁<br>丑 | 十<br>分 | 丙<br>子 | 十<br>分 |
|  | 十<br>分 | 戊<br>午 | 八<br>分 | 己<br>巳 | 八<br>分 | 戊<br>辰 | 一<br>分 | 己<br>卯 | 七<br>分 | 戊<br>寅 | 十<br>分 | 己<br>丑 | 八<br>分 | 戊<br>子 | 十<br>分 |
|  | 八<br>分 | 庚<br>午 | 一<br>分 | 辛<br>巳 | 五<br>分 | 庚<br>辰 | 七<br>分 | 辛<br>卯 | 六<br>分 | 庚<br>寅 | 十<br>分 | 辛<br>丑 | 七<br>分 | 庚<br>子 | 十<br>分 |
|  | 九<br>分 | 壬      | 九<br>分 | 癸      | 十<br>分 | 壬      | 十<br>分 | 癸      | 七<br>分 | 壬      | 九<br>分 | 癸      | 一<br>分 | 壬      | 九<br>分 |

發行所

東京市麻布區森元町貳丁目八  
 振替口座東京壹壹參九壹番



|   |    |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 宮 | 亥  | 宮 | 戌 | 宮 | 酉 | 宮 | 申 | 宮 | 未 | 宮 | 午 | 宮 | 巳 | 宮 | 辰 |
| 乙 | 二十 | 甲 | 十 | 乙 | 十 | 甲 | 七 | 乙 | 九 | 甲 | 十 | 乙 | 二 | 甲 | 十 |
| 亥 | 分  | 戌 | 分 | 酉 | 分 | 申 | 分 | 未 | 分 | 午 | 分 | 巳 | 分 | 辰 | 分 |
| 丁 | 七  | 丙 | 七 | 丁 | 九 | 丙 | 六 | 丁 | 十 | 丙 | 十 | 丁 | 九 | 丙 | 九 |
| 亥 | 分  | 戌 | 分 | 酉 | 分 | 申 | 分 | 未 | 分 | 午 | 分 | 巳 | 分 | 辰 | 分 |
| 己 | 十  | 戊 | 九 | 己 | 五 | 戊 | 九 | 己 | 十 | 戊 | 八 | 己 | 八 | 戊 | 一 |
| 亥 | 分  | 戌 | 分 | 酉 | 分 | 申 | 分 | 未 | 分 | 午 | 分 | 巳 | 分 | 辰 | 分 |
| 辛 | 十  | 庚 | 九 | 辛 | 九 | 庚 | 十 | 辛 | 八 | 庚 | 一 | 辛 | 五 | 庚 | 七 |
| 亥 | 分  | 戌 | 分 | 酉 | 分 | 申 | 分 | 未 | 分 | 午 | 分 | 巳 | 分 | 辰 | 分 |
| 癸 | 十  | 壬 | 二 | 癸 | 七 | 壬 | 九 | 癸 | 九 | 壬 | 九 | 癸 | 十 | 壬 | 十 |
|   | 分  | 戌 | 分 | 酉 | 分 | 申 | 分 | 未 | 分 | 午 | 分 | 巳 | 分 | 辰 | 分 |

右の表を一寸四方毎に切り取り、二ツ折に貼り合すときは、六十枚の札を得べし、  
 例へば 甲子 十 四分 の如く切り取り、二ツ折にすれば表 甲子 裏 十 四分 となるが如し  
 の札を用ひて運命を判断する也(其方法は巻首に説明せり)



|      |    |      |    |      |    |      |    |      |    |      |    |      |    |      |
|------|----|------|----|------|----|------|----|------|----|------|----|------|----|------|
| 三分   | 午  | 五分   | 巳  | 四分   | 辰  | 四分   | 卯  | 二分   | 寅  | 六分   | 丑  | 五分   | 子  | 四分   |
| 十又九分 | 丙午 | 十又三分 | 丁巳 | 九又三分 | 丙辰 | 九又五分 | 丁卯 | 九又三分 | 丙寅 | 九又五分 | 丁丑 | 十又一分 | 丙子 | 十又一分 |
| 十又五分 | 戊午 | 八又三分 | 己巳 | 八又五分 | 戊辰 | 一又二分 | 己卯 | 七又三分 | 戊寅 | 十又二分 | 己丑 | 八又四分 | 戊子 | 十又六分 |
| 八又一分 | 庚午 | 一又七分 | 辛巳 | 五又五分 | 庚辰 | 七又三分 | 辛卯 | 六又   | 庚寅 | 十又三分 | 辛丑 | 七又三分 | 庚子 | 十又四分 |
| 九又一分 | 壬午 | 九又三分 | 癸巳 | 十又五分 | 壬辰 | 十又五分 | 癸卯 | 七又   | 壬寅 | 九又三分 | 癸丑 | 一又一分 | 壬子 | 九又一分 |

發行所

東京市麻布區森元町貳丁目八番  
 振替口座東京壹壹參九壹番

◎紀念特價一部郵稅共金四十錢  
 中外出版社



|   |   |      |   |   |      |   |   |      |   |   |      |   |   |      |   |   |      |   |   |      |   |   |
|---|---|------|---|---|------|---|---|------|---|---|------|---|---|------|---|---|------|---|---|------|---|---|
| 甲 | 辰 | 二匁四分 | 乙 | 巳 | 十匁五分 | 甲 | 午 | 九匁三分 | 乙 | 未 | 七匁   | 甲 | 申 | 十匁一分 | 乙 | 酉 | 十匁四分 | 甲 | 戌 | 二十匁  | 乙 | 亥 |
| 丙 | 辰 | 九匁三分 | 丁 | 巳 | 十匁三分 | 丙 | 午 | 十匁九分 | 丁 | 未 | 六匁五分 | 丙 | 申 | 九匁五分 | 丁 | 酉 | 七匁   | 丙 | 戌 | 七匁九分 | 丁 | 亥 |
| 戊 | 辰 | 八匁五分 | 己 | 巳 | 八匁三分 | 戊 | 午 | 十匁五分 | 己 | 未 | 九匁三分 | 戊 | 申 | 五匁五分 | 己 | 酉 | 九匁   | 戊 | 戌 | 十匁五分 | 己 | 亥 |
| 庚 | 辰 | 五匁五分 | 辛 | 巳 | 一匁七分 | 庚 | 午 | 八匁一分 | 辛 | 未 | 十匁三分 | 庚 | 申 | 九匁五分 | 辛 | 酉 | 九匁五分 | 庚 | 戌 | 十匁二分 | 辛 | 亥 |
| 壬 | 辰 | 十匁五分 | 癸 | 巳 | 九匁三分 | 壬 | 午 | 九匁一分 | 癸 | 未 | 九匁一分 | 壬 | 申 | 七匁五分 | 癸 | 酉 | 二十二匁 | 壬 | 戌 | 十匁五分 | 癸 | 亥 |

一寸四方毎に切り取り、二ツ折に貼り合すときは、六十枚の札を得べし、

十匁四分  
甲子  
の如く切取り、二ツ折にすれば表  
甲子裏  
十匁四分  
となるが如し、此六十枚

ひて運命を判断する也(其方法は巻首に説明せり)



|      |
|------|
| 274  |
| 1020 |



終

